

## ～季節だより～

### 人ごころしたしみがたき村にして もみづる時のすでに三たびか

この短歌は、谷鼎（たに あがた）という歌人が、戦火で自宅を失い、郷里の秦野に居を移してから的心境を歌ったもので、「人心に親しみにくい村けど、いつの間にか、3回目の秋を迎えてしまった」といった意味でしょうか。

お気づきですか？ 秋を「もみづる時」と言った言葉で表現しています。この「もみづ（もみず）」とは、草や樹木の葉が赤や黄色に変わることを意味する動詞で、「もみじ」の語源となっている言葉です。

この「もみじ」という言葉は、もみじ狩り、草もみじ等で親しみがありますが、ヤマモミジに代表されるカエデ科の「モミジ」だけが、樹木に興味を抱き始めている人々を感わしています。〇〇モミジの一群を、カエデ科のひとつのグループとして考え、〇〇カエデのグループとの区別に苦労されているようです。

植物名（標準和名）を付けられた人たちのお話を

聞く機会がない今は、なぜ〇〇モミジと名付けたかについて、本当のところは分かりません。でも、その名前ともみじの様子とを見比べると、ひとつの統一性が見出せます。紅葉か黄葉かは別として、その色付きの鮮やかな樹種に〇〇モミジと名付けたようです。もちろん、モミジが付けられていない樹種の中にも、もみじの見事な樹種もありますが、少なくとも、「〇〇モミジ」と名付けられた樹種は、その色付きはとても見事です。

春先の新緑が、緑色という言葉だけで言い表せられないのと同じように、もみじの赤も黄も、とてもその色だけで言い表せることはできません。加えて、同じ樹種でもその立地により、また、同じ個体でも葉のつく場所により、微妙に色合いが異なります。ひとつの葉でさえ、見事なグラデーションを見せる場合もあります。

この秋、皆さんが奥多摩を訪れられ、カエデ科の仲間をたくさん観察され、それぞれの彩りの変化を楽しんでくだされば幸いです。

## ～ 寒 づ せ え ～

### 紅葉の奥多摩湖右岸ハイキング

行 先：奥多摩湖右岸  
開催日：11月6日（月）

このハイキングの出発点となる小河内ダムの堰堤近くに、「湖底の故郷」と刻まれた紅い巨石が置かれています。ダムで湖底に沈んだ故郷を偲ぶ歌碑です。

この紅い巨石は、チャートと呼ばれる岩石で、今から1億5千万年以上も昔に、はるか南の海から奥多摩に転がり込んできたものです。巨石にはカイメンの骨片や、放散虫という小さな生物の遺骸がびっしりと入っています。それにまじって、湖底に沈んだ故郷への多くの入々の熱い思いが、そこには深く刻まれているのです。

ダムによって滞えられた奥多摩湖の水面のきらめきを木立の間から眺め、湖底の村の昔日の面影を抱きながら湖畔の道を歩きます。道はこの季節、さまざまな樹木の彩りの中にあります。ケヤキ、アブラチャン、イタヤカエデなどの黄、紅をさしたコナラの黄、イロハモミジ、メグスリノキなどの紅。また道にそった茂みには、秋の野草が可憐

な花をつけています。ヤクシソウの黄、セキヤノアキチョウジの紫、ノコンギクの淡い青紫などなど。そして紅い実をぶら下げたヒヨドリジョウゴ……

以前、この道をご案内した皆さんの中に、強い弱視の男性がおられました。その方が、同伴の奥様の手と杖を握りしめながら言われた言葉が思い出されます。

『足もとのやわらかな感触、とてもいい匂い、葉がざわめく音、今とても幸せな気持ちです。』

「湖底の故郷」の歌碑に始まり、紅葉と静寂の「山のふるさと村」までの道は、とても魅惑的なハイキング・ルートです。皆様もぜひ、植物たちの秋のかがやきとの出会いに奥多摩へいらしてください。



## ～ 行 っ て き た め よ ～

### 金袋山の巨樹を訪ねる

日原のバス終点で降り、橋を渡ってT字路を右に曲がる。左は日原川本流（地元では「大川」）、右側が小川谷だが、共に谷は深い。岩壁や鍾乳洞を見送り、直ぐに金袋山への指導標を左手に見る。この場が東京都などとは思えない。

道はガレ状の斜面をジクザグに登るが、落石さえ気をつければ思ったより登りやすい。この岩場群を一石山と称して、その懐に抱かれている一石山神社は、上野の寛永寺の関係だったらしい。ここから流された仏像が拝島で見つかり、拝島大師になったという。そういえば浅草寺の観音様も東京湾で漁師の網に引っかかったとか。

道は途中で二股になり、左手に入って広い尾根に出れば間もなく大きく傾いたミズナラの巨樹に会う。すぐ近くに真っ直ぐに伸びた樹齢数百年のミズナラが倒れていた。人間も同じ様に真っ直ぐに伸びると意外に弱いものかも知れない。オイラ

も間もなく倒れる運命かと、やたら心配。

それにしてもミズナラの巨樹はスゴイ。幹まわりは8m、傾きの反対側には、倒れないように恐竜の背のごとく幹が張り出し、そしてコブだらけ。自然の中で生き抜くには、こんな姿にならなければ駄目なんだ。大変なのだなぁと感じる。オイラは生きて行けそうもないと感じた。

この尾根筋に金袋山・人形山などの名前がつけられているけど、それはピークの形もなさず、山頂を示す木の札だけであった。地元の人達がそれほどこの山にかかわっていたのかも知れないと感じた。例えば、砂漠の民はラクダに年齢別の名をつけるとか、漁師は一年魚はオボコで、数年を過ぎてトドとなって「トドのつまり」という言葉が生まれたように。

この巨樹のすぐ近くに、石を広げたいかにも「ストーンサークル」と思えるものがあつたが、双方がなぜ残ったのかは不明。

## ～ 奥多摩「山岳救助隊日誌」抄 その1～

### 仙人の秘密基地

今年の紅葉は全国的に遅れていると、ニュースなどでは報じていた。それでも11月半ばをすぎると奥多摩でも、雲取山や鷹ノ巣山などの高いところでは、葉を落とした木々が簾となってサワサワと風に鳴っている。

多摩川沿いの「奥多摩むかし道」辺りがいまは見頃なのだが、夏の高温がたたったのか、あまりいい色が出ていない。ケヤキなどは、どの木も早くから葉が茶色に枯れて、そのまま散りもしないで枝に着いたままだ。

11月14日、奥多摩町役場の観光産業課から、「雲取山臨時ヘリポートの北側へ400メートルほど下った所に、小屋を建てて住み着いている不審者がいる」と届け出てきた。

いま町では、増え過ぎた野生のシカの駆除のため、猟友会が山に入って猟を行っている。

12日の土曜日、雲取山の奥多摩小屋下辺りのシカを駆除するため、勢子が臨時ヘリポートから日原側、唐松谷方向にスズタケの中を下っていくと、400メートルほど下った所が平に開けており、古い小屋架けがしてあって、そこに60過ぎの男が住み着いているようだった。勢子は男と「この付近で猟をやっているから気をつけてくれ」などと、二言三言話したが、見たことのない人だった。小屋はその辺の木を伐って建てた仮小屋のようなものではなく、ちゃんとした角材で建て、屋根はトタンで葺いてあったから、相当に手を掛けたものようだった。

町役場では、雲取山周辺は国立公園内であることから、無断で小屋を建てたり、住み着いたりすることはできない。何よりも狩猟のエリア内なので本人に危険が及ぶ。そして身元の分からない不審者であれば、何かよからぬことをやっているのかもしれない。確認して、もし本当に住み着いているのであれば説得して山を下ろさせたいので、山岳救助隊も同行してもらえないかというものだった。

山岳救助隊の仕事とは思えないが、狩猟エリア内に住んでいるとなれば、本人の生命身体に危険が及ぶ、そして不審者となれば、すでに逮捕されたが今年5月に発生したミッドツケの高齢登山者を狙った強盗犯人のように、登山者に危険が及ぶようだったら見過ごしておく訳にもいかないだろう。

私は水源管理事務所に電話し、不審者のことを確認しているかを聞いたが、知らないという。私は猪狩山岳救助隊長と相談し、町役場の職員に同行して登ることにした。役場の担当者の都合で登山は10日後の24日となった。

山中に住む不審者は山岳救助隊員の中で話題となった。誰かが「岡部仙人じゃないの」と言った。私もそんな気がしていた。

岡部仙人こと岡部徹(65歳)、40年間を山小屋の管理人などをして山に暮らし、最後は町営「雲取奥多摩小屋」の管理人として雲取山で23年間を過ごした。そして3年前「まだ登ってみたい山もあるし、やりたいこともある」と言って山を降りた。

私も長年親しく付き合ってもらったし、山岳救助隊も救助活動で何かとお世話になった。その仙人が山を降りた後の足取りが全くつかめない。雲取周辺の山で見掛けたなどと、情報は入るが私は見掛けたことがない。氷川にある実家にはたまに顔を出すというので、「話したいこともあるので、立ち寄ったら交番に寄るように」と頼んではあるのだが、梨のつぶてである。

以前、観光協会に仙人が顔をだしたので「こんさんが会いたがっていたよ、顔をだしたら」といったら、「取材されるから、いやだ」と逃げる用に消えたと、事務局長の渡辺さんから聞いた。

また日原駐在所の前田隊員から「いま仙人が日原から奥多摩駅行きのバスに乗った」と電話があったので、私は駅に行ってバスを待っていた。しかし日原からのバスには乗っていなかった。察知して途中で降りたものであろう。

つい1週間ほどまえも、古里駐在所の山内隊員が古里駅の近くの魚屋で、魚を買っている仙人を見付けた。駅の方まで後を追っ掛けて行き話し掛けた。「仙人、いまだここに住んでいるんですか」と聞いたところ、「それは教えられない。ナイショ」と言って立ち去ったという。

私には毎年賞状は届くが、もちろん住所などは書いていない。何か私に見付からないよう行動するのを楽しんでいるフシがある。遊び心の旺盛な仙人ではある。猟友会が見掛けたという山中の不審者は仙人に違いない。そんな所に秘密基地があったのか、私は確信に近いものを感じていた。こんどこそは捕まえるぞ。

11月24日早朝、私は仙人とも親しい前田隊員と山岳救助車で後山川林道を片倉谷に向かった。水源管理事務所が要所要所に設置してある物資搬送用のモノレールで七ツ石尾根を登るためである。片倉谷出合いには役場観光産業課の担当者天野係長と、水源管理事務所の山崎奥多摩出張所長が待っていた。

モノレールは片倉谷出合いから七ツ石尾根を忠実に、ノボリ尾根登山道の下まで架けてある。人の歩く速さで1時間40分も乗ると終点である。最大斜度は40度近くある1本レールを、モノレールはゆっくと進む。風に枯葉がバラバラと音をたてて降る。1週間ほど前、初雪

があり雲取山では数センチ積もったというが、南側の七ツ石尾根に雪はない。終点は明るく開けた尾根である。真っ直ぐ 20 メートルほど登ると、鴨沢からのノボリ尾根登山道が七ツ石尾根を大きく巻いた先端に飛び出す。

ここからブナ坂までは 15 分ほどである。さらに稜線を 40 分も歩けば町営「雲取奥多摩小屋」に達する。雲取山臨時ヘリポートは小屋のすぐ手前、五十人平にある。まだ少し早いが奥多摩小屋で昼食とした。

町営「雲取奥多摩小屋」は 3 年前に岡部仙人が山を降りてから、雲取山荘の新井信太郎さんが管理人を引き継ぎ、スタッフの井上さんが小屋番として詰めている。

昼食をとりながら私はとぼけて井上さんに聞いた。「最近岡部仙人を見掛けない、すると井上さんは「仙人、一昨日と昨日ここに寄っていききましたよ、10 日ほど前に猟友会の人と会ったのは仙人だと言っていましたよ」と言う。

「やっぱり仙人だったか、今日は自然公園法違反で捕まえに来たんだ」と冗談で言うと、「もういないと思うよ、小屋をたたくで大きな物はここに持ってきて置いていったから。昨日山を降りたんじゃないかな」と言う。「しまった、1 日遅かったか」。「仙人がその小屋にいたこと、井上さんは知っていたの」と聞くと、「知らなかった。でもときどき登山者が仙人と会ったと言っていたから、近くにいるのかもしれないとは思っていたが、そんな近くの小屋に住んでいたとは知らなかった」と言う。

いないのならしかたがない、場所だけでも確認して来ようとして全員でヘリポートまで戻った。

ヘリポートから北側のスズタケの中についている雪の残ったけものみちに入り込む。雪の上に靴跡が付いている。辺りは背丈ほどある一面のスズタケの原だ。真っ直ぐに唐松谷を目指して下っていく。300 メートルほど下ると尾根は緩やかになる。突然スズタケが切れて視界が開ける。「おお」と、みんなが声を漏らしそうになった。そこには、平らな日当たりのいい空間がポツカリと開いていた。

小屋があったと思われる平地は、きれいに片付けられ、隅の方に材木が整然と積まれていた。屋根に使っていたと思われる古い波トタンも積み上げられ、風に飛ばないように上に大きな重しが乗せられてある。囲炉裏があったと思われる場所は黒く炭の跡が残っていた。

七ツ石山方面に見晴らしの利く小屋の外と思われる場所に、奥多摩小屋でよく仙人が作っていたものと同様の木製椅子が、壊れかけたまま据えられていた。

昨日までここにいた住人の「もうここに戻ることはない、あばよ」という意志がハッキリと読みとれる。

おそらくここには以前から古い仕事小屋があったのだろう。この下の唐松谷上流には、昔ワサビ田があったと聞く。そのころ利用していて、いまは使わなくなった古い小屋を、仙人は奥多摩小屋にいたところに見付けておい

て、山を降りてからコッソリ住み着いたものだろう。土台に敷いてあるブロックなどを見ても、相当に古い小屋だったことが分かる。そして 3 年もの間、仙人は誰も見付からずここを秘密基地として利用していたものではないだろうか。

この秘密基地から、北アルプスや東北の山、まだ登っていない山に出かけ、疲れてはここに帰ってきていたのかもしれない。以前観光協会の渡辺さんから「仙人が渓流釣りの年券を買って行った」と聞いたことがある。この下の唐松谷でイワナでも釣ったのであろうか、こんな上流まで漁協の人が登って来る訳でもないのに、何とも律儀な仙人らしい話である。戦争が終わってもジャングルの中でヒソソリと暮らしていた、横井正一さんとダブってくる。

しかし横井さんとは違う、仙人のこの行為は遊びである。誰かにこの秘密基地を見付けられたら、小屋をたたくで山を降りようと思っていたに違いない。誰も知らない所ですから、遊びは面白いのである。誰かに知られてしまったら遊びは終わりである。仙人は遊びの神髄を知っている、さすがである。人に見付かっても未練がましく住み続けているようでは、遊びを知っているとはいえない。いさぎよさが大人の遊びのおもしろさであろう。

それにしても 60 半ばになる男が、本当の遊びをやっていることを知って、私も前田隊員も思わず笑ってしまった。「仙人らしいなあ」、なんとなく嬉しくなった。

10 日前、とうとう猟師の勢子に小屋を見付かってしまった。山岳救助隊がやって来る。追っ手が来る前に山を降りようと、翌日から小屋の解体に取り掛かったものだろう。

山岳救助隊がやって来ても、不審者が仙人と分かれば下ろすこともできない。それでは山岳救助隊も困るであろう。という仙人の気遣いもあったのではないだろうか。

余分なものは何も残さず、きれいに掃除もしてあった。水源林の山崎所長も「問題になるようなものはなし」と納得し、片付けられた小屋跡を写真に撮っていた。

仙人はどこに消えたのであろう。第二の秘密基地はどこにあるのだろうか。奥多摩小屋の井上さんには、「深田久弥の百名山を、1 番から順番に登ってみたい」とか「四国八十八ヶ寺を巡ってみたい」と話していたという。

金剛杖を持ち、「同行二人」と書いてある遍路笠を自深に被り、低い声で般若心経を唱えながらピッと背筋を伸ばし、たった一人で四国八十八ヶ寺巡りの旅をする仙人を思った。

「チクショウ、また逃げられた」。 H17.11.30

(青梅警察署山岳救助隊副隊長 金 邦夫)

# 奥多摩昔語り

## 奥多摩の地名 (3)

大丹波（おおたば）は、JR 青梅線川井駅の北奥に広がる地域をいいます。大丹波の語源は、「田はないけれど、田があるように思わせる地形」から付けられたといわれています。「たば」と発音する地名は、大丹波と隣接する小丹波（こたば）の他、多摩川上流の丹波川（たばがわ）、山梨県の丹波山村（たばやまむら）などがあります。また、「たば」とは、山中の平地で奥まった所のことといわれていますので、大丹波のように大丹波川の両側に小平地を形成する地形と合致すると思われる。大丹波の端は、川苔山から日向沢ノ峰を経て棒ノ折山、黒山方面へとつづく都県境の稜線です。

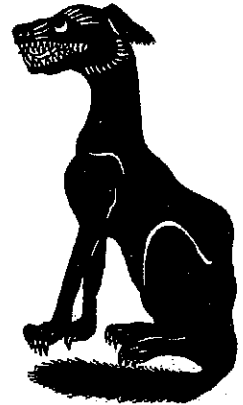
むかし、この辺りは、狼道とか狼棲戸（おおかみすんど）と呼ばれたところで、二ホンオオカミが我がもの顔して棲んでいました。とにかく、かれらの遠吠えが毎日のように聞こえてくるので、村の者た

ちは恐ろしくて誰も近寄れませんでした。

こんな話がありました。『おしげさんという気丈なお婆さんがいました。ある晩、あまりうるさいので、吠え声に向かって、「うるさいから静かにしろ、おれが死んだら掘って食え。」と怒鳴りました。それ以後、この狼の声は聞かれなくなりしました。月日が過ぎて、おしげ婆さんは、天寿を全うして菩提寺に葬られました。ところが数日後、おしげ婆さんの土まんじゅうはきれいに掘り返されて、屍体がなくなっていました。』と。

【資料】

奥多摩町誌、広辞苑



## 山の花だより

### 草木の名前いろいろ

私たちに名前があるように草や木にも必ず名前があります。命名者には、それなりの理由があるのでしょうが、ヘクソカズラやハキダメギクのように気の毒な名前もあれば、オッチカカタバミとかペラペラヨメナなど、品性を問われそうな名前もあります。

そこで、名前の由来や語源を探ってみました。まず、身近な男とか女という字がつく植物では、なぜか女はありませんでした。男がつく植物は、オトコゼリやオコトヨモギなどがあり、セリやヨモギよりもランクが落ちます。ゼンマイの胞子葉をオトコゼンマイといって食用にしな

いのは、男は食えないヤツという意味なのでしょう。

ちなみに、オトコヨウゾメ（男痒染）という木は、可憐な白い花を咲かせ、美しい紅い実を結び、決してランク落ちではありません。男の面子ではなく、オトコヨウゾメの名誉のた

めに弁護しておきます。

オトコヨウゾメを語呂合わせで覚えるために「男用済み」と覚えた人がいましたが、くれぐれも誤解のないように。

犬や猫がつく名前もたくさんあります。ただし、犬に関しては「理由あり」で、イヌザクラやイヌブナなどは、サクラやブナよりワンランク下がるという意味があります。

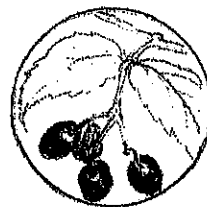
奥多摩には熊、猪、鹿、猿等が棲んでいます。クマシデ、イノデ、カノコソウ、サルナシなどの名前があげられます。さらに狸や狐もいます。遠目にきれいなアザミを見つけたと思

い、近寄って見るとアザミによく似ていて騙されるのでキツネアザミという名がついたのだそうです。ところで、みなさんは、十二支の動物名がつく植物を全部言えますか。これは宿題です。

※ 辰→龍、巳→蛇、酉→鳥と読み替えます。



オトコヨウゾメ



## ガイドだより ～雲取登山教室～

私は、奥多摩観光協会のイベントの中で毎年恒例となったステップアップ「雲取山登山教室」に、初回よりガイドとして携わり、参加者の皆さんの日常の健康管理とトレーニング、安全で楽しく山へ登るためにはどうしたら良いか等を考えております。

この登山教室は、東京都の広報によって応募された方々の中から抽選によって選ばれた40名～50名を約半年間、登山教育に始まり、2度の試行登山を経て、装備、服装、態度ともに登山者として充分満たされた方のみ30名～40名が雲取山頂を目指すことができる、1泊2日のイベントです。

それでは、もう少し詳しくこのイベントを紹介してみましょ。先ず、5月に開校式に始まる登山教室を下記内容により行います。

- ① 挨拶（スタッフの紹介と挨拶）
- ② 講義（安全な登山と山の歩き方）
- ③ 実技（日常のトレーニングとストレッチ）
- ④ 講義（軽登山学入門・地図と天気図の見方）
- ⑤ 講義（服装・装備・食料等）
- ⑥ その他（質問・意見交換）

その後、試行登山として8～10名がグループを組む6月に倉戸山、9月に本仁田山に登り、その2つの登山を通して登山教室で学んだ数々の体験を積み上げ、東京で一番高い山「雲取山(2017m)」に挑戦するものです。



この教室を通じて登山というひとつの目的を持った人達が、いかに体力をつくり、いかに安全に、いかに団体生活の中で思いやりを持って、協力しあい目的を果たすかを学びます。これから登山を志す人に役に立つのではないかと、私は考えております。

来年もこのイベントは実施される予定です。他にも、当協会は年間を通し色々なイベントを企画しております。奥多摩の山と渓谷は四季様々な美しさと厳しさをもって、皆様のお出でをお待ちしております。私達が心を込めてご案内申し上げます。是非、お出かけください。(N.T.)

## 施設案内

### ◆ 奥多摩ステーションギャラリー・そばの花

奥多摩駅舎2階には、今年4月にオープンしたステーションギャラリーがあります。

駅舎の作りと調和した木目のやすらぎをふんだんに活かした空間には、奥多摩を感じさせる作品が展示されています。

また、併設されている「お食事ギャラリーそばの花」では、窓から山並みを見ながら手打ちそばが美味しくいただけます。2階にお越しください。

手打ちそば 400円です。

## イベント案内

奥多摩町と観光協会では、秋から初冬に向けてイベントを用意しております。「名人・達人観光ガイドの会」のガイドがご案内します。

希望者は、官製往復はがきに参加したいイベント名・住所・氏名・年齢・電話番号（2名様まで）を明記の上、奥多摩観光協会へ。（抽選の場合あり）

- 1 11月6日（月）  
紅葉の奥多摩湖（右岸）に親しむハイキング  
応募締切日 10月18日 まで（一般健脚）
- 2 11月15日（水） 紅葉の倉戸山を訪ねる  
応募締切日 10月18日 まで（登山）
- 3 11月23・24日（木・金） 初冬の巨樹コース  
日原散策・わさび作り体験  
体験宿泊施設「ねねんぼう」1泊  
応募締切日 11月6日 まで（登山）
- 4 12月15日（金）  
むかしみちに冬の樹形を訪ねる  
応募締切日 11月18日 まで（ハイキング）  
※ 他に、12月16日（野鳥観察）もあります。  
募集人員：各回30名  
参加費： $\yen$ は9,500円、他は500円  
3

### 《 編集後記 》

紅葉に染まる奥多摩へ是非いらしてください。  
奥多摩湖畔の散策もステキです。

発行：奥多摩観光協会

住所 〒198-0212 奥多摩町 氷川 210

電話 0428-83-2152 Fax 0428-83-2789

編集：名人・達人観光ガイドの会